

夕雲庄

下





夕雲齋 下同錄

一一一一一  
泉岳寺驟勦付僧院口上書事  
四十六人者大仰領付首送之事  
手負死人而見分付隊家口上書事  
細川殿十七人對面付義士詠叱事  
一列切腹付辭世追善詩奇之事  
初歩之子大遠鳴之事

象岳寺騒動付僧元に上書（事）

四十人乃至者た道中上野後首ハ向じくと包懷中  
守候裏紙と下のとの首と一而よ達み給（付）  
にてかつき心志前に象岳寺よもと和焉（裏内は背月音  
ノ朝やえしるの上に各小袖一つを差し以て是を  
漱て絶（ささら）ひ火津ともか俄の事にて調（さう  
いか）ら元寮の庭木炭二三俵を散（さん）へて各と  
わざめを後粥（あさり）をさしきまと養寒（おが）く行（ゆ）  
酒（さけ）すのあと和焉思（おも）かと刮禁（さけいん）の事酒筈（さけいん）成  
（さく）れ子中（こちゆう）因（いん）化（か）ゆぬ（ぬ）くの小桶（こぼう）へ酒（さけ）とく  
いもう小足（こちゆう）とて即（そつ）ちお文（ふみ）中（ちゆう）此（こ）る僧（そう）（云）儀

トヨモ御（ご）印（いん）付（は）く上書（じょうしょ）とさへ出（だ）し其（その）越（こし）

十又日（とどき）朝（あさ）れつ時何事（なに）ハ不（ふ）好（い）大（おほ）勢（ぜい）多（おお）し  
速（はや）く持（も）手（て）負（うけ）と肩（かた）よ新（しん）寺（てら）内（うち）入（い）る寺（てら）中（ちゆう）夥（わざわざ）  
爰（あい）捨（す）勤（げん）先（せん）門（もん）と善（よし）國（くに）の皆（みな）被（は）ひを済（す）め因（いん）通  
家（か）至（いた）て（いた）て之（の）之（の）懈（け）（け）良（ら）上（じょう）節（せつ）後（ご）と討（とう）捕（ぶ）皆（みな）是  
と排（ばら）ひ逃（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ（のが）れ  
仕（む）事（こと）上（じょう）節（せつ）後（ご）首（くび）内（うち）通（とお）墓（はか）而（め）傳（つ）ひ（め）何（なん）様（よう）  
若（わ）成（せい）果（かく）可（こ）り間（ま）丈（じょう）御（ご）門（もん）内（うち）通（とお）墓（はか）而（め）傳（つ）ひ（め）何（なん）様（よう）  
内（うち）通（とお）墓（はか）所（所）各（かく）通（とお）可（こ）り被（は）ひ合（あ）ひ貯（たま）水（みず）下（さ）か  
底（そこ）あらゆる香炉（こうろ）抹（ぬぐ）香（こう）御（ご）傳（つ）ひ（め）被（は）ひ石（いし）則（まへ）元（もと）  
相（あわ）せ右（う）内（うち）二人（ふたり）墓（はか）所（所）傍（そば）て手（て）桶（おけ）水（みず）被（は）ひ

末首と洗内通後石塔ニ二腹月(後)首と石塔と  
取手を裏テと車手と地より取手付首と洗杯役内  
又曰前後紙筆と備付手前也考之多有之何事  
既認被り後見手見付手墓而止讀之止上  
書よ其後情中多小合口と拔て内通後石塔  
之上腹(相て石塔)而書之て一番よ因着助首と  
身之名と名紫燒香役手右小合口と取手腹  
首之上よ三度わて退り残ふ而一人ノ名紫  
て燒香相済内通手に上書高声よ讀上す而残る  
車平伏して居手右に上出仕事にて皆一同  
よ啼りて又而焼香役の燒香相済手す

前と持參狀前室早入用無之の主君よ歎  
みては在れ我あらゆる意を乞ひて吉家歴と此首  
汚手事外と存ひて家に事簡げ上  
官抵よ御元斗の如く役ヤ則前相渡節付前  
詔文則佛前(墨)古と詔手の室早しあと禮  
儀我あらずお詔手の上野度印家東只そと我い  
存ひ通よ所と御急よ可有之定も追慕て詔手  
傳文様よと承次十八万石御上御實文様手  
内自古にあゆ取手て詔成りてやけとは我あらず  
刀よ承成ち門外(私)あて四十六人の首可き  
軍と門内室可詔成尾鷲と傳手付手浦とてはる

易の御弔と奠にて振舞ひ候事也  
き土中へ死骸不存事御弔引吊より候  
矣詫り其内終仁波より上野父子御弔  
了如何と承ひ又子孫たに見事而御弔候  
ひ家中元辰不承一僧にて御弔候事也  
御事不詫りけ時九月十九日小付而寮  
一帰り以上

内通歿於墓所各列拜而讀上文

元禄十八年十一月十八日大石内助良雄始御  
足輕寺坂吉左衛門終四十六人謹而奉告亡君尊靈之越

亥年二月丙日亡君尊靈與吉良上野助歿及傷之前

柳留之故障有之御本望無之割卒余之及沙汰御  
一人而生害之返家后僕丁至極悲歎徹骨髓畢

内公裁之上我等共如此之企

尊君之御心

還而御怒氣奉恐入得不可戴天之義難熟止何少

可奉絶御意願之存念今取時常相待事一日三秋之

思然蠅蠅肱頃賴朝堯可仕外与幾度か思業廻候昨夜

年各申合上野助歿奉討唯今御首ヲ供申候御墓下

之尊靈再斂被遂御襟幘給カレ忌敬究賢

ぬ此象岳寺説勧よかしきれ細川誠中後仰と歎を

て表過つてしむる平隱岐守後大佛龕とこめ水望  
監物後ハ信皿子西山とからし堂上也度首ノ事アホ

ようう和焉うけれ思ひしるふ方一上故家うき首な  
しに本家事とやまん志へいよあ家乃伊成と母  
理不くは渡り金へいせんと高葉うてうき首よ  
廻向うゆくお弟子中と云ひかせ奥の間林行書  
柳の内（ぬく）隠（隠）とおゆ（墨わら）神社の石  
葛れ根首の重（だき）とぞれ（是と御）（其中）通  
乃書付と入まつと其言葉よ回首取（と）よ  
うせりいよ出家の才（ひらめ）こと理不くよ、  
た（し）ゆは（と）くを首（さく）（退け）（まか  
寒氣の時（ひ）まほ儀（ご）こ書（と）て入（おき  
萬一上故家の侍札入（おき）すふよ

おわてハ（の）構（か）乃（の）ア  
早（はや）（と）く（と）く（と）く  
寺内（てらうち）（と）く（と）く（と）く  
と引（ひ）く（と）く（と）く（と）く  
な（な）れ（れ）

四十六人町取付首送之事

四十六人の者た細川敏忠安藤平隱凌慶毛利智賢  
水野監物安西四ヶ所（古河の越後）伊賀春慶  
内藤半よりて伊賀さん右の甲家より清元の武士衆  
岳寺（持越）不又急よ伯耆を安門城（石せり）  
せつ財退かあと仰付同付石川（石馬）市野村八郎松永  
小八扇三人と内用の儀、禮を弓追付伯耆守安尾  
參（さう）作渡され内務の方もと仰詔の書付とも  
ゆれども住寺（と右の者た追付つう）（と）も渡  
さ禮をふ名文度の良場（お安場）す（も）道中長尾  
久持（まやか）と内務（みやか）共通奥（おとこ）（且）上



と憚るより似らるる事無なしと安氣うます  
てや私万の事たりし時召分は御放さざる一とゆふ  
原宗在駕ヤルふ腰もとてぬふ道具そよがる一  
長道具者無然(まに定)と有其後引出時も是と  
足取よむの(モ)也乃くもさうとおがくも是、駕馬屋  
きけふよくしてかくハヤルふもと和萬物達や門も時  
分内着及下知(モ)庭まで行列立一肉御志(シテ)おけ  
禮(モ)事(モ)よ(モ)と駕馬太挺斗(モ)アリル身を人斗  
泉岳寺(モ)と駕馬太挺斗(モ)アリル身を人斗  
ケ(モ)宗皆(モ)駕馬(モ)參(モ)愛宕(モ)泉岳寺  
と乃道筋町通(モ)裏(モ)と(モ)小人目付(モ)廻(モ)足(モ)立

以(モ)御者(モ)長刀(モ)腰(モ)と(モ)せひ(モ)サ(モ)の(モ)一(モ)御  
と(モ)あ(モ)あ(モ)、(モ)遠(モ)と(モ)御(モ)腰(モ)利(モ)右(モ)の(モ)者(モ)  
御(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
御(モ)人(モ)目付(モ)と(モ)用(モ)連(モ)判(モ)書(モ)付(モ)家(モ)名(モ)腰(モ)呼(モ)入(モ)後  
門(モ)と(モ)御(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)  
腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)腰(モ)

事よりは大小を渡され、と双方を詰め候中此物と  
仰りましまさる在れ連元の内帳領持參の者と仰り四十  
六人不残左の通改之書院へ、御統同付筆者にて  
残し親類書とせまざと四十人の者たゞ來ひづれ  
と膝切とて下足小袖、もとく淡黄上衣、放付る足の長  
月額利立斐はけいとちやせんよし、しとくとと  
ゆく乃悔とすと大小の柄ハあしに切やまとま面ちと  
まきぬ中の上ハ火事ぬ中にて津金と入ヨリと玄関よ  
金ゆく上、つけ積玉仰る加羅燒不思ひ子がつと利  
其後伯耆も後平井同付よは松田左馬辰源又萬石  
侍列度よ四十人者を呼出一列度次多員久の内焉合意

く相ひては歩ひ同付二三人を以抱みて夜よつきとし  
たゞまがつも筋遠よ居り右の者たゞ委細仰るよ  
付一と仰着と教起

一大石内焉取て仰る其方事仰地勝毛者  
ひふも内焉取て所務手とも仰着と上承  
一上車度宅に仰時年少取ハ川時とよと度を  
一年の時分晴天よ有之ひ仰取る月浦何處總儀仕  
一夜討合祠内合山山川に着故中合山  
一合下仕白布ヲ付り  
一内へ入ひ何段木門とお破入り  
一内のみつまきめ仰段木門とお破入り

け者ニ業内させ蠅燭と毛燭よりて礼入は湯殿  
狐の下を尋ねて上野殿に御見く不識

一 唐間ハ不系ト御唐間存ルト參る上屋敷  
御ノ不識其門間十次席物室左不系ゆ  
内より人吉仕付院の石室にてテ詠チ放ツ得  
シ一人刀と抜か勧め可喜食討氣ヤハ

一 其沙カトお仕人又人ナリ右ノ物室左  
又一人切てあヤハ間十次席毛燭とお系スヤ  
御身名於之上ヨ奈のうめの上毛白小油乃  
下毛メ寢毛革モ上ト唐ヤ者も多難人と  
存立是上野殿左不識と承ひ候矣言焉無カ  
ト揚ヤハ

間敷毛被と以同の上と窓ヤム

一 上野殿とは何處見知る服拭拔毛刀志  
メ何拔毛刀志御唐間存ルト院敷毛被  
付毛時服拭拂拔毛刀志右の物室  
毛出成す時十次席毛燭と於御首

ト揚ヤハ

一 毛被十次席右之通ふト又人毛被内敷  
又上通毛被毛被御着き者毛一毛底不  
上衣内敷毛被毛被毛被又内敷毛被  
毛上毛被見覺不毛見毛白小袖毛被大方  
上野殿毛被毛被毛被毛被毛被毛被毛被



見せしは、又一うよと廻内下ともす。

一十次扇同の際、底ちの役、亦御金丸戸も放して、さて此の柄當つてゆか。

一夜扇を討し、内が志に寫りよに、夜扇、これ見ゆるを見、無不中也、御着や。

一討氣の者何人、記と覺え、而勧者吉みへと見えやひ、上を度ひ、御主志儀、徳よし、追一人、元離くよ、お扇者大志大夢の事、と、今二三人、元持て討るひ、て後火、え、火と消一水と、然蠍燭之燒、燃と二所、よ集教と改消ゆるゝ、而て、尼扇及家、至元治と慕て、ややく、再廻向院

前より、行藏集、始、時別移、付泉岳寺、(引取)。

一夜中食事、さきのめの仕事、小糸度え、志の仕一大石主税といつて、や主税、居、持者、とて、は、こや年え、幾つよ、孤、や十丈、某、は、成城、と、れ列在御傍く、もくや、成、某、と、御、參、是、江戸、と、居、也、立所よ、私、と、其、時、内、為、反、も、今、度、初、て、石連、す、御、着、と、實、よ、江戸、初、て、と、相、見、(は)、上、に、く、き、并、し

一忠臣蔵、と、ふ、社組、是、怪寺坂、右馬、上、廻門、前ま、そ、參、と、處、と、後、又、不、ゆ、と、ゆ、と、れ、何、居、之、然、不、ゆ、と、ゆ、と、れ、何、居、之、然、

一 水野小介尙歟後山中は因通幕主は能家來唐持  
中興と可れ主に支殘念之處の何處即列座因前  
方移抄し

主従二人の御用付元列在（御用付若者細川誠中右衛  
信丸の使主三人門あるお詫びやうじて則序へられ左清  
丸の使主一人余をも承立付御城とまに二人ハ麻上下急  
（あせ）一内通脇家本浪人十七人（鐵牛哥）  
七名伊藤主ふく、主外松平隱岐守（十人毛利禪變也）  
十人水道監物守（九人教子兄弟と引分て御取  
れて連馬門前よりちり鷺園の武士うち二三四五  
禮より成る前後の度々を浦よ座變とあつて、い處士

きひ／＼守護／＼商賈の町人よもと門を内へまし  
前村忠尾助の事あつて、おもては、伯春ち後家司の今  
船を販じて、念入らし御地毛をかく、此のうり

伯耆守後門前すてお參り道具をうち一張半うち一張  
尾篭をよ達の教へ知れど達中短人しげ門一を奇  
かくて後月十八日より上野廢寺持牛と鹽松院の氣  
にて象鼻寺山石狹一呑乃古僧にて上野廢の首  
とゆ物として左義友へ送ら達はるはれの花文たのと  
家老友人かへ候ふ

首 まつ

紙包 一つ

右 沈清丸印以上

キ 二月十八日

吉良左衛門

左石田源急

丹波文門

皆じよもけ達ハ其取何者、仕事とぞした氣夏門乃  
麻

吉良少將よ首納豆の嚴言か那

又讀人へ

サセ乃首と小桶よ入ひきて

寺ノ利里へ送致く事よ

既み首と纏て葬禮奉すとき、上野慶代の祖吉良、  
五穂る慶天正年中十二月十四日織田信長の為よ害  
せられ大井川に逸れて首を捨て縊て三度何事よ葬り  
紫圓山常弘と戒名次月日因へをして人へりやく  
きよ彼乃領地を教代奉公せし人三羽善提手も系  
結仕立て彼れ戒名を受けるよ今度津(下ア藍院  
一語きよ上也度と圓山常弘と戒名あつてまことに  
和鴉志うれい事と詫ひて後ようくの事とぞ  
はふとく奇異の事なれば、か難しみうきん取付の  
時うと一勧すれど防矢は一筋助も村於て腹切く被  
るもゆくからじよ四位のササモ原より家慶に

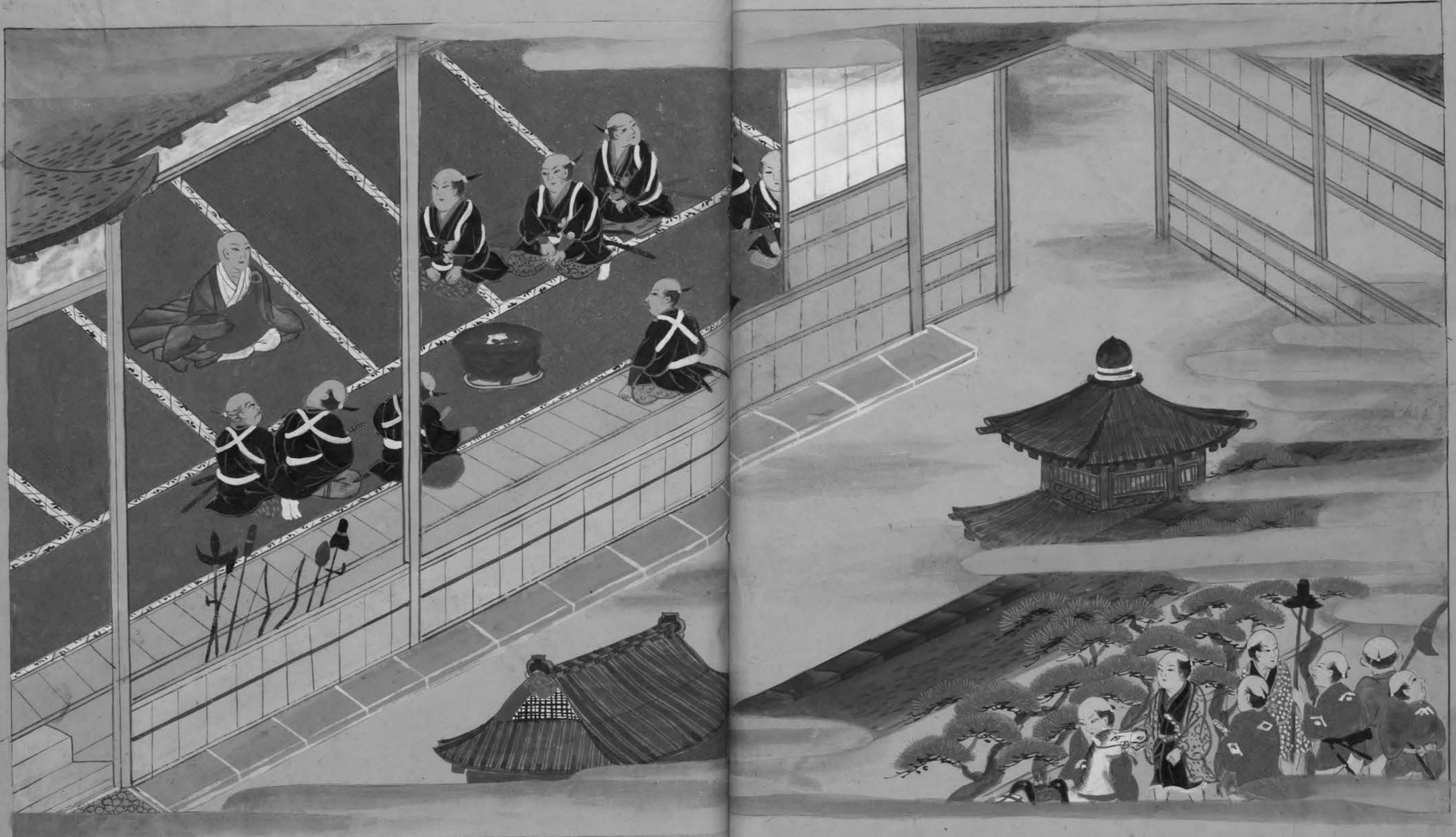
一て友佐ひくをされども武勇才心と矢じて物を  
此處に巣儀のけむて信頼よ首と揚らば後人の歎嗟と  
清らる事に惜きひ事あるすや

多員死人御見分付隣家に上書事  
十二月十日吉良氏義家と狗名平馬と御主中  
臣用不相違らるゝを

昨秋ハ以東海道内通家本邦完一切可以上を  
を役教官の行移立至るを負ひ狼藉ヤヨリと漏れ負ひ  
志あむ程の清元引継立退マタク死體を残不カの事急  
医者にて止焉マタク止

而用前稿葉丹後守安雅キシマサ遣されまし大御瀬カミスの御用也

壬辰お詫び度カツヒ入前使去狗名平馬ウラマの  
侍室カムイや<sup>テ</sup>多度方タヂマカいくは立合タチハいやと申ル如く承  
りて、公カミやカミてふくフク、若カミさとカミいとカミ、  
之後吉良殿ヨシタケミコロを安忍アシタクて御同付安忍アシタク、  
宿スル久爲友アシタク御同付アシタクは神后ミツコロ爲極マツシキ、  
早速ハヤシタクかた馬カタマ往ハシマて爲マツシキ小人目付コトヅキ六人衆スル  
負死人御見分有アリ



其歎討死し者を

南小倉前家主 小林平八 庄爰庭左衛門  
小倉丸義後 小塙源郎 庄浦義右衛門 次友二萬  
基和上を參拝 清水一学 小倉吉祐筆 院永元爲  
同丽右田川 大塙繁清 小倉丸義中程 斎友清左衛  
門丸義後 小原平右衛門 岩谷丸義後 左馬源太郎  
岩谷丸義後 彩足弥七郎 岩谷丸義後 爪木長次郎  
小玄関前 郷 村竹 岩谷丸義後 牧野春斗  
馬糸義表園 里屋信十郎 小玄關前 中乃守兵衛  
右死人十六人  
右乃四十人ハ刀服指さし血付切きり付つ人ひと又人ひとハ傷きず不知  
左房廢家末年負うけ者を口上  
一家を松原多仲よしのぶ上山町十四日未入いり軍事ぐんじと申  
て表あての相あわせ音おと付つけ私わたし小倉門根ねめ小倉居ゐ所ところ逃のがれ逃のがれ  
よて被は村矢底ち負おやの得とく大勢だいせい而ひ小倉門放はなば逃のがれ  
にて打う倒たお石いしと底そこゆて 働はたか不ふ成せい  
一左房廢家次第じだい十郎急いそよしと移うつ後ご常じょう着きて廣間ひろまへ  
孙こ孫こ急いそよしと大勢だいせい而ひ小倉よしと逃のがれ逃のがれ  
よ付つけ小倉よしと逃のがれ刀とと又而ひ小倉よしと付つけ大勢だいせい而ひ逃のがれ刀と  
麻ま負およしと移うつ居ゐ日ひ如ご庄浦しょうほと可こ能の越こるよしと倒たお御み  
不ふ成せい

一 上北度用人文不匱リ上小屋より車、又強劫付  
付至多の事、大勢切立ト付及氣度の夜間一系  
の事大勢而リ付手負リ。

一 在氣度中小姓文石新氣度上移大近習夜寄主て  
居立の事、大勢切立ト付及氣度の夜間一系に處  
大勢而リ付手負リ。

一 在氣度中小姓山谷郭八角上私候小包より之を處  
火事シヤ付足る得及難難力にて又而シム先切  
接旦夕近所と系め處礼入者私乞シ付相勵手  
負リ宣主處後更復勵不私乞シ

一 在氣度役人加在有事リ上私候小包より之を處

右ノ津勵メ私候リ付小包前手手負リ。

一 中小姓永代氣度上近而夜寄主て私乞シ付及  
大勢切立ト付勵シ得及深手負リ。

一 中小姓十日取死松山ニ處リ上私候津リ付及至  
久處小包は又主人私乞シ付何事切接立及  
存ノ得及手負勵シ。

一 中小姓天即定進リ上氣度局為義主テ郊外之處大勢  
切立ト付勵シ得及深手負リ前手近而倒立。

一 中小姓場江助馬リ上書院近所座浦より之處  
切立ト付勵シ得及深手負リ。

一 中小姓住若森石馬リ上小包より之處小包口又

手負ひて御不承知

一枚人石川志左衛門より上り有目乃  
一枚人松山又兵衛より上り有目乃

一里徑小波大河内市原下と裏門にて右を出處  
左浦角火事有之る門脇に付門の弓うるぎ  
得とも火車移動未よて左浦火車院にて付  
門附不ヤ火湯を打破大勢下や火盆合麻敷まづらしき  
一里徑森立馬糞而流二急急下と裏門にて右  
左浦火事大勢切ニヤ付出生而火盆合麻敷まづらしき  
一門下番中百八丈ヤよ大勢切ニヤ間出而病  
氣アリ。

一駕籠者 兵庫つ 廁者 義丸又兵衛上右肩  
右通よ脚綱ムモ礼入者に病負ひて清元  
移動し因左妻細観不ヤ  
右手負木走人

礼入者取病屋の道ノ

一弓

二張

一矢根

木車袋入

一矢根

三十本

一矢

二挺

白鞘刀

獨守上書付

一手本

一本

太刀鞘

一本

一笛

一管

一疋

四筋

一謹付細引柳子三筋

内一筋柄切丸

一小木丸 大三枚

家名書付戸壁（捨方）  
（シ）偏へ場所のやうとて

一連弓 一つ奇わし

都多いさよゆのじ底土丸

恥われせよかるやあく汝や  
藤住沢蒲生の鹿流間森氣行年六十八  
上野廢首（ノミテハシ）ひくらすらも麻衣子四一ヶ所  
左左の股一ヶ右の膝は二ヶこじく一ヶ所（イカシマ）在廢處（ハシマツル）有療治や而麻一ヶ所後けき一ヶ所七寸八  
葉邊道有療治や而麻一ヶ所後けき一ヶ所七寸八  
サ深也や家來す麻乃者八人所制

猪谷平馬 平澤助左  
新見傳藏

小笠原忠翁 高橋源乾寫

上野廢家を左高源善年六十代嘉慶家乞弟翁  
六十始更人望と被ア逃が而之の左高方、行  
く詠ききこく云々（シテ）も前は自身義不よ隠一屋事  
詠左の穴より入ヨリ其家済舍人云者右の事と云々<sup>（シテ）</sup>  
ふゝや窓よ麻毛刀麻達麻毛と又ア次利刀麻毛  
よあマトシユヘ安樂者の内也アトヨリ其外中止は小  
村山主みを驚す御志よ石原源左衛柳原守驚石源若  
大驚歎と初近隣の面とにと書はう被多



吉良氏義後に上

即十四日此夜八つと上を承宅并私宅上浅井内通  
家来大勢火事おこるもて押さへ様子と長を二ヶ  
伊子と然裏門廊とお破火消し作はせり其とち  
矢走羅刀をとお手いて切入る家来たゞ公防の爲  
矛圍さやまきはふと急年いそとしの一人戦討たたかひ不ヤ身負けらばヤ斗たたかひ  
てじ方家来を負死人多きと拵そなへ居宅すみや切き付つけて  
人の家来又近習ちかう之族立公防こうぼう我若後わがしりニテ所ところを負けらば額ひら  
瘡うずきと目め血あせにて薙後忘却わざわざ仕つか内うちと上を承うけいれまえ來  
存居まごるまご參さんえやあらむ宍軍しゆぐん討うき礼れいの者ものたゞりて一人を  
おえ不ふやひ以上

ち尾おと税ぜい版ばんに上

即朝あさ七つ前隣隣人家吉良上を承宅浦瀬安ら火事ひじと  
とりやと名を承うけいれ喧げん花はなと碎くずよおする家來未だ石  
連場れんばとてあゝ墨すみ花はなと傳つた越こよ声こゑと熱浪ねつろう四近しきん家  
來行ゆき因源いんげん小篠守こしのしゆ十門原宗直むねはるを者ものて  
移うつれ儀ぎ方ほうをもと者もの上を承うけいれと見え不ふやひ同ひと義  
被うけ接つづは役わく今上御殿ごとうと討う捕つかを望ま達たつと傳つた越こよて承  
りへ第だい門裏うち人數じゆ六十餘よ人じん者ものおおむねよおへよ  
む大事だいじを不ふ事ことの辞ことと暗くろくは庭にわて疑うそ人ひとを不ふよ  
け外ほかのと不ふ事ことの上

昨夜七つ時より火事にてとちくれよ方へ人声付付居  
るうちのまゝ老良丸馬場御門内より出る爲尤甚  
相知らず付多あゝ門外より人材を移す處より其後  
駆一歩併居て居其通は仕合ヤリハアリ上り後  
安満庄より上

松平無波大輔俊内藤源左衛家本真柄勤支  
口上

昨夜七つ時何より燒捨安らる火事杯底子より在る  
然く知らず内鳴辰靜<sup>さう</sup>より上

本所酒屋十番御吟味より上書

十六日既六つ時又世に戸内可りく存る處よりふと不知者

血ぬきよ成りてはりよ被りゆる潭山追手未事必  
定也足達志の軍四人あり御墓石首城於京ノ残  
志余わざ限る潭山と可討果しの事と存立と立  
可りて存る處より人押込ひも負より酒と一つ振葉<sup>ひき</sup>  
やの后酒御法度より得て天下第一の御法度と傳  
さる不用の人の御法度より是酒度やと臭氣侵入と投入  
被りて見せ四斗持てえど一多忙の石突にてかく  
と突抜茶碗より多く飲被りて亨る硯筆とあせり放  
り在る處より得て臭氣より書付り

山猪ぬく力と折きて半引弓大源文玉葉  
以へる扇被りゆる体外痛り故よりおもてゆるこやくせ活

よおほの人の行儀一句可仕と

寒蟬より身もへりあひ仍來か 寓義助鷹春帆

さわくも首よ追付やとて走つて波よ投げぬ裏絶縁

四よ全却ぬけ祓ひ綱よて封す其よ書付拂ひ

元禄十八年二月西日淺野内通氏家来

大高源入討死ス死體取捨の方酒代

右之通すてよ拂祓ひ以上

細川辰十七人 将面付義士詠吟事

未二月二日細川誠中も慶衝恩内記辰と伴に其方、大石  
因翁と云義ある士と見せん。見度之と仰歌の  
者共十七人自見と詠れど各底もはる時作參、考

年達忙乃故年既志いふさても公私の行儀よ毛筋  
何れ地乞と云奉と則くおとぬ今日若(主)君乃斜理と  
はりせえ何れ應むきはりんと詠くと應され  
之と仰きふ門脇放縫てやとふ、考年くに即放抱病  
事た私考死と近くやうとえとまねとしとくよ是を  
よのよひたう御恩の経と謝一章アヤマシムとて各退と  
よて有るこまけ終よ死も近くおがんといわ所詰ヤと云  
乞も不景ふようひ事山鹿山也(よみ昨秋北夏)  
亡君内通氏の生歿(四十人)の者を呼集ら候て  
そ一入機嫌よける事丸もて物語られ候候中



彦庵へ詣先づ御ひぬ事比シテひんよくも摶て死  
と近アリにかしむと心シムうかぎに付其越アシガタより物  
禮スルて心地シムけよ御料理ヨウリ頂戴スルて各其席シマツ退きルふ  
此ハシ必死ハシミよ極ハシマツ事ハシマツる者四十人シシナシの者ハシマツ生ハシマツき心シムねく  
時ハシマツ前ハシマツ此ハシマツ移ハシマツり行ハシマツよ志シムひ吟詠ハシマツルふ奇ハシマツシ於後ハシマツ朝  
さぬ心シムと述ハシマツよリ利大石内ハシマツ助嚴言ハシマツ  
わらハシマツて花待ハシマツきオサヤ称ハシマツ行ハシマツおハシマツは  
年ハシマツ比ハシマツ言ハシマツ

小野守十内

索ハシマツて浮せぬハシマツ、近先ハシマツと御法ハシマツの花ハシマツと待ハシマツを乞ハシマツ

原 宗右衛門

思ハシマツいきや今般立春ハシマツてす萬ハシマツわやとお待ハシマツひ  
某且 富森助右衛門

まふと春ハシマツと川ハシマツかぬ宿ハシマツーク

本村国右衛門 貞行

浅野門通頭長矩爲獨夫吉良上野及棄世正初於殿  
中有事之日不遂志而獨夫全頭故臣等遺恨暫不息從  
是同志之義士相謀相義欲刺獨天然時未至而覃ハシマツ今月  
今日嗚呼ハシマツ愚祖父木村吉兵衛奉仕淺野霜臺長政而憂憇  
亲女正長重恩故ハシマツ愚父木村惣兵衛昵近故門通頭長直而  
請ハシマツ慈愛ハシマツ愚不肖雖不敢受長矩寵ハシマツ依父祖之功勞奉祿  
無違養妻子育奴僕恩澤莫外望而送年月今也躰白

又決必死欲無辱君臣之義何幸如之哉冀得吉良  
上野吉良左告衛之頭獻 長矩之影前者也尚紹  
野詩一絕以述其志

身寄寒雲東海東 命懶恩義世塵中  
看花對月躋幾歲 時矣曉天霜雲風

不念故遊此處泉無音響

思之如夢如幻道之如幻御法の承より

述取捨義 武林唯七隆重行年三十歲

三十年來一夢中

捨身取義夢尚同

双親卧疾故鄉在

取義捨恩夢共空

神燐々五廟則休

誄名竹平

人世の道一つれどもくこと消ふ言ひも確まふうに

因人う乃ち言比經人

梓うやぬもは道六ぬくも見えへそぞゑに言ひ言ひ

芦壁和助常成

天地れゆがむふよ種くにを喰せきにかふとく

同人絶句

せやいはらはせせやいのう

國野金右衛門包秀

上野度や云下と揚て亡君へ偽作也

うれぬひ雪乃あらうの野柳り那

一列切腹付辞世返着欲事

其年も言てわく、毎年春より、まほ恒例、而銀  
一門の御裁許となく、隆月に言て、未二月四日より、吉良  
丸島處と詰定て、石を、徳大御付仙石、伯耆守處町法  
事所内羽遠江處、冒付毛口表札、安作酒、と越田通  
家本上を、あと討ひ、若仕合不取、付領地石を、近訪安藝  
守内飯の毛作酒、毛口安藝守處、(川越守)同日内通  
及前年四十六人切腹仕(き毛)御書付と、して、作酒、  
御同付元其外内役人是と、まつて、川細川御守處、  
捨使として、御同付、其本十石、久承内記、後、御三番作  
酒、(さく)

浅井内通候初使御池毛内用酒、伊丹公其上内

柄不屈仕形、付御仕毛被、作付吉良上毛取  
儀、官構被差、金出主、人、讐、執事、内通  
家本四十六人被、徳富堂上毛完、押込鬼道貞杯、於  
系上野と討ひ始末、公儀不忍、假不取、内儀之切  
腹、付志し

右之起作酒、(さく)かと内務、收す、あ徳富、行酒、上  
け、(さく)御領十七人代者太水多

行、(さく)四五、太石内務助良雄

、(さく)、安場市平

同、(さく)空、高麗處、(さく)兼亮

、(さく)、

宍森清左支

同、(さく)三七、原宗萬、(さく)元辰

、(さく)、

増田惣右衛門

、(さく)、

二宮新右衛門

同	室	同	木田 勇助
空	同	横井儀右衛	
小野寺十門秀和	同		
同	吉田入丸鶴		
五	同		
磁貝十郎鶴正之	同		
七	同		
協於源壽金龜	同		
五	同		
近松助六行童	同		
四	同		
三	同		
高森助六正角	同		
五	同		
湖田又三高教	同		
三	同		
赤垣源亮重賢	同		
五	同		
吉田源左衛門	同		
七	同		
矢田源兵助武	同		
九	同		
間森萬光延	同		
八	同		
中村角左衛	同		
九	同		
藤長右衛	同		
十	同		
行園平太史	同		
十一	同		
栗原平右衛	同		
十二	同		
吉田源四郎	同		
十三	同		
奥田惣右衛	同		
十四	同		
大石漸齋位清	同		
十五	同		
早水葵花滿亮	同		
十六	同		
行辰切腹乃文慶一	同		
十七	同		
猪籠源流	同		
十八	同		
猪籠源流	同		
十九	同		
猪籠源流	同		
二十	同		
猪籠源流	同		
廿一	同		
猪籠源流	同		
廿二	同		
猪籠源流	同		
廿三	同		
猪籠源流	同		
廿四	同		
猪籠源流	同		
廿五	同		
猪籠源流	同		
廿六	同		
猪籠源流	同		
廿七	同		
猪籠源流	同		
廿八	同		
猪籠源流	同		
廿九	同		
猪籠源流	同		
三十	同		
猪籠源流	同		
卅一	同		
猪籠源流	同		
卅二	同		
猪籠源流	同		
卅三	同		
猪籠源流	同		
卅四	同		
猪籠源流	同		
卅五	同		
猪籠源流	同		
卅六	同		
猪籠源流	同		
卅七	同		
猪籠源流	同		
卅八	同		
猪籠源流	同		
卅九	同		
猪籠源流	同		
四十	同		
猪籠源流	同		
四十一	同		
猪籠源流	同		
四十二	同		
猪籠源流	同		
四十三	同		
猪籠源流	同		
四十四	同		
猪籠源流	同		
四十五	同		
猪籠源流	同		
四十六	同		
猪籠源流	同		
四十七	同		
猪籠源流	同		
四十八	同		
猪籠源流	同		
四十九	同		
猪籠源流	同		
五十	同		
猪籠源流	同		
五十一	同		
猪籠源流	同		
五十二	同		
猪籠源流	同		
五十三	同		
猪籠源流	同		
五十四	同		
猪籠源流	同		
五十五	同		
猪籠源流	同		
五十六	同		
猪籠源流	同		
五十七	同		
猪籠源流	同		
五十八	同		
猪籠源流	同		
五十九	同		
猪籠源流	同		
六十	同		
猪籠源流	同		
六十一	同		
猪籠源流	同		
六十二	同		
猪籠源流	同		
六十三	同		
猪籠源流	同		
六十四	同		
猪籠源流	同		
六十五	同		
猪籠源流	同		
六十六	同		
猪籠源流	同		
六十七	同		
猪籠源流	同		
六十八	同		
猪籠源流	同		
六十九	同		
猪籠源流	同		
七十	同		
猪籠源流	同		
七十一	同		
猪籠源流	同		
七十二	同		
猪籠源流	同		
七十三	同		
猪籠源流	同		
七十四	同		
猪籠源流	同		
七十五	同		
猪籠源流	同		
七十六	同		
猪籠源流	同		
七十七	同		
猪籠源流	同		
七十八	同		
猪籠源流	同		
七十九	同		
猪籠源流	同		
八十	同		
猪籠源流	同		
八十一	同		
猪籠源流	同		
八十二	同		
猪籠源流	同		
八十三	同		
猪籠源流	同		
八十四	同		
猪籠源流	同		
八十五	同		
猪籠源流	同		
八十六	同		
猪籠源流	同		
八十七	同		
猪籠源流	同		
八十八	同		
猪籠源流	同		
八十九	同		
猪籠源流	同		
九十	同		
猪籠源流	同		
九十一	同		
猪籠源流	同		
九十二	同		
猪籠源流	同		
九十三	同		
猪籠源流	同		
九十四	同		
猪籠源流	同		
九十五	同		
猪籠源流	同		
九十六	同		
猪籠源流	同		
九十七	同		
猪籠源流	同		
九十八	同		
猪籠源流	同		
九十九	同		
猪籠源流	同		
一百	同		
猪籠源流	同		
一百零一	同		
猪籠源流	同		
一百零二	同		
猪籠源流	同		
一百零三	同		
猪籠源流	同		
一百零四	同		
猪籠源流	同		
一百零五	同		
猪籠源流	同		
一百零六	同		
猪籠源流	同		
一百零七	同		
猪籠源流	同		
一百零八	同		
猪籠源流	同		
一百零九	同		
猪籠源流	同		
一百一十	同		
猪籠源流	同		
一百一十一	同		
猪籠源流	同		
一百一十二	同		
猪籠源流	同		
一百一十三	同		
猪籠源流	同		
一百一十四	同		
猪籠源流	同		
一百一十五	同		
猪籠源流	同		
一百一十六	同		
猪籠源流	同		
一百一十七	同		
猪籠源流	同		
一百一十八	同		
猪籠源流	同		
一百一十九	同		
猪籠源流	同		
一百二十	同		
猪籠源流	同		
一百二十一	同		
猪籠源流	同		
一百二十二	同		
猪籠源流	同		
一百二十三	同		
猪籠源流	同		
一百二十四	同		
猪籠源流	同		
一百二十五	同		
猪籠源流	同		
一百二十六	同		
猪籠源流	同		
一百二十七	同		
猪籠源流	同		
一百二十八	同		
猪籠源流	同		
一百二十九	同		
猪籠源流	同		
一百三十	同		
猪籠源流	同		
一百三十一	同		
猪籠源流	同		
一百三十二	同		
猪籠源流	同		
一百三十三	同		
猪籠源流	同		
一百三十四	同		
猪籠源流	同		
一百三十五	同		
猪籠源流	同		
一百三十六	同		
猪籠源流	同		
一百三十七	同		
猪籠源流	同		
一百三十八	同		
猪籠源流	同		
一百三十九	同		
猪籠源流	同		
一百四十	同		
猪籠源流	同		
一百四十一	同		
猪籠源流	同		
一百四十二	同		
猪籠源流	同		
一百四十三	同		
猪籠源流	同		
一百四十四	同		
猪籠源流	同		
一百四十五	同		
猪籠源流	同		
一百四十六	同		
猪籠源流	同		
一百四十七	同		
猪籠源流	同		
一百四十八	同		
猪籠源流	同		
一百四十九	同		
猪籠源流	同		
一百五十	同		
猪籠源流	同		
一百五十一	同		
猪籠源流	同		
一百五十二	同		
猪籠源流	同		
一百五十三	同		
猪籠源流	同		
一百五十四	同		
猪籠源流	同		
一百五十五	同		
猪籠源流	同		
一百五十六	同		
猪籠源流	同		
一百五十七	同		
猪籠源流	同		
一百五十八	同		
猪籠源流	同		
一百五十九	同		
猪籠源流	同		
一百六十	同		
猪籠源流	同		
一百六十一	同		
猪籠源流	同		
一百六十二	同		
猪籠源流	同		
一百六十三	同		
猪籠源流	同		
一百六十四	同		
猪籠源流	同		
一百六十五	同		
猪籠源流	同		
一百六十六	同		
猪籠源流	同		
一百六十七	同		
猪籠源流	同		
一百六十八	同		
猪籠源流	同		
一百六十九	同		
猪籠源流	同		
一百七十	同		
猪籠源流	同		
一百七十一	同		
猪籠源流	同		
一百七十二	同		
猪籠源流	同		
一百七十三	同		
猪籠源流	同		
一百七十四	同		
猪籠源流	同		
一百七十五	同		
猪籠源流	同		
一百七十六	同		
猪籠源流	同		
一百七十七	同		
猪籠源流	同		
一百七十八	同		
猪籠源流	同		
一百七十九	同		
猪籠源流	同		
一百八十	同		
猪籠源流	同		
一百八十一	同		
猪籠源流	同		
一百八十二	同		
猪籠源流	同		
一百八十三	同		
猪籠源流	同		
一百八十四	同		

辞世

大石内蔵助

う樂や思ひの事、おまへに要せ十月より雲那

原宗右衛

あてても君とおもひやしとくを急く死ぬ山道

宮森助右衛

うき一やねの途河奈れち筆

吉田忠左衛

我眾衆人の善き扱ふはふく佛と名す山ノ聲

小野寺十門

おもやめ葉草となりが利仰爲えぬむえ  
松平信政（前稿）行檢使（了）御同付松口又左衛門翁根

壬二郎後内立合作波さり門射十人  
行年十六 大石之元良金 及諸 波賀清左衛  
同 三面 塙久安壽武庸 同 荻川十左衛  
四面 中村助助正辰 同 大鳴年年  
同 三面 不破數右衛正種 同 加友又左衛  
五面 千馬之氣光忠 同 荻川十左衛  
六面 木村景義貞行 同 波賀清左衛  
七面 貝塙源為友信 同 加友又左衛  
同 三十二 大高源又忠雄 同 宮原久左衛  
同

辞世

大高原五陵翁引子葉

梅で香ひ茶也とわ  
死あ此旅

毛利甲斐守後ノ於役守テ而日付詩次有駕辰承

後改名後印立合にて作波さく印飯十人

行年十九 高漢駕 兼貞 又錯又人

同 杏 小野寺幸秀富

同 三毛 畠崎吉つ常樹

同 三主 武林唯七 隆重

同 三孟 倉橋傳承 武幸

同 空 村松義秀直

同 杏八 枝野十平次房

近友高駕  
鶴御忠駕

神原政高駕

田上又左衛

江良清右

行年十四 腸田村駕 武亮  
同 四十 前原伊助宗房

同 杏四 田部六郎光風

辞世 村松義秀

益田駕 生毛多利也今得幸之矣

武林唯七

仕合ト死か乃山鴻毛也

水野監物後ハ猿守テ而同付久留十左衛門赤井秀

行三公作渡支那印飯九人

行年十三 田浦信九郎正辰 爪落 小野桔六

同 杏六 奥田定高駕

同

横山進左衛



行年十七

矢頭左衛七 教兼

名藩 枝野源内

同 木七

村松文宣高置

同 廣瀬羊助

同 三木

神崎五郎則休

同 稲垣左助

同 三十七

茅野和助常成

同 德贺文秀

同 木六

間十次扇光真

同 青山氏助

同 三十七

横川勘平宗則

同 山中淳彦

同 三十七

三村次左衛兵昌

同 田口安左衛

辭世

横川勘平

はてあく死あるを速かにゆく母  
川えきて道あるせす

神崎五郎

空去赤城窺敵郭

死體と神山焉よ志川らひて芝泉岳寺(送)後を  
ア則長矩乃墓不前後四方よ石碑とある(名字名榮  
行年はてと切付ま後ハ體ハち中よ埋れぬ事と名は  
さん天よきいくさと往還の旅人を驛馬と發よ  
こやの貴賤男女大キ童よもて詣のをもあうぐ  
間をなく廻向の権青よして左盤は山と篠ヶ近里  
を伝ひわざりて詣群集(され)後よ墓布よ也と  
ゆいて詣の者とぞ見仰るゝれゆつとおほき男  
女嫁の前よ泣きわしもふと多けまことにと同  
きやうとね一二月七日間十次扇(毒泉岳寺)詣

一て墓所めて諦一ひふ

君うゑめニあく汝すよの娘濃

命ゆきゆき名乃殘ふりれ

大石内務助廢内、主役廢原宗左衛門昌鶴半左衛門不破  
教直駕後傍の勢を、廢初四十六人の内方く何度一率か  
才やねの得も、廢木八百一所よさしけるべくセセと書  
て、およ内務从墓而へまゆ。

苦せ下哀れときゑてとも兵士の

名すをやまと井よ立のやまと川

間幼六死體とい親類秋平氏のけが生中き又かと  
ふ者引取て西河於家へ、つてよ付て

友よつとおやへゆくすき魂の  
す名とし乍らぬ若は下わ

かくもゆかゆに達一きは至り、一やあ一廻  
而て其後支の十次郎嫁(たおとて泣き)

林大学頭信敷

官裁下令各處死刑其志雖遂其生不全

天乎命乎景時運乎難堪哀情牧涙而作

追善

閑門突入蔑刑卿

易水風寒壯士情

炭唾秋裏追頤讓

薤歌淚滴挽田橫

精誠貫日死何悔

義氣拔山生惠輕

四十六人齊伏刃 上天無意佑忠貞  
其頃何者詎非本而八景此詩之戲乎

本所大亂

四十四人大剛者 破門越屏我先罵  
家中男女不及云 遠近寢耳深水夜

少將夜首

無活意炭部屋中 昔少將今笑止也  
間數喜兵逢一鑪 重次不透揚首夜

左兵落淚

逃去者共漸々集 主見死骸尋首急  
今更落淚不得心 被步親泣痛疵泣

野村番人

鹿鳴不起番大郎 野村今上之分別  
於見遣八百屋亭 非葉出立恩折筋

高家時雪

道理哉今年暖冬 時雪消易用心凶  
名計高家逃足疾 不凝一度又搥鋒

延引上杖

急切延引可依事 世間評判更無窮  
不向手手雖憚上 野村辻番同腹中  
不運上界

佗日用心如藏六

運命今夜炭部屋

神也佛也御座乎

アハマサスカ

芝寺晚鐘

家老近習外無官

本望遂無所忌

静詣主墳以首供

四十四人必先輦

明日誰聴入相鐘

追悼絶句

掌よげく一叶きりそよぐれ

其角

春帆、母殊方へ

立き跡乃わんじいもトヨキ弟獨活

沾衣

親とあざとめてすく能よう

全

追若

くや散き忠よ実比入ふ梅比散

鑑水

散ふ花をうね男うてすくこみ  
三方よあく此日とも能じる利  
友に来て人を躰のなほすうわ  
庵付よ人を源きておつよき 晚松  
山蟬や劍よ半ま次西乃え 常渴  
苗代乃思せとぬくし不はれよ 宋泊

狂歌

赤穂塩敷をうほしてかぬるましのち、火と氣蒸す  
淺川馬糞淡よたぬ上をも内おいて腹の下ニ年越  
吉良ゆきよ上を度、浅淡よ赤穂のあはよ大石れむ  
上枝枝葉もれて酒をやしまとひて詠白と賣

景虎（シマカミ）

（シマカミ）

かくあるとあらぬと追念し詩奇絶句をもててこの  
外此の無教とあつて事多くてあらず書濃思  
古今儀士多とて毎うれきの如きうへとせ  
こゑにて感涙よきく汝

幼少子共遠鴻之事

朧月中旬よからず一列加ざれど其至る所  
寧殿（セイデン）也と云ふとせし所作出すとぞ

父大儀主人讐讐と報ひて四十文後迄嘗食  
上宅に押込鬼道具杯持奉上野と討ひ始ま  
公儀を不忍ひ既不和付切腹ゆ付候之終在遠鴻

力付者也

門番助二男 大石吉子代

源鷲（シマカミ）嫡子

厅足利六

右同人二男 年十三 同 大三郎

右同人二男

同 六之助

忠志三男 年六 同 大三郎

宗右鷲（シマカミ）嫡子

原 十次郎

冬至二男 年木 同 澄定八

嘉右鷲（シマカミ）嫡子

矢田作十郎

助右鷲（シマカミ）嫡子 年二 同 澄定八郎

助右鷲（シマカミ）嫡子

不破大又郎

初从嫡子 年五 同 中村忠三郎

右同人二男

木村宗十郎

和久嫡子 年四 同 勉次

右同人二男

大畠次郎

年十 常

定右鷲（シマカミ）嫡子

奥田清十郎

八鷲（シマカミ）嫡子 年七 国嶋友松

右同人二男

是作又之助

右十八人の内十五名はよそうと伊豆の大島を流亡

年十

千鷲（シマカミ）二男

是作又之助

作付えり よ糸穀衣類ふ ももまで下へまぬ  
お詫しきと切すの子たすすとよもと遠修わる  
きくと作みて残る者たへ親類者ともせ者立  
仰あけよを成よ利き神ハ右き有ゆと

遠へて立きてはあゆめとみどりよ

お身よつはをゆわされて

ゆこぞいひもきに世よわざー時ハ生立と薦  
乃筆だけのこよだくへ齡よとよせれねよくせと今き引  
久も十又よそん年月とてじ母の心こころわ  
かよさく終て三社乃行祭し終よは日月れ  
れと教おと乃神泥にそむくくせや

従覗世事不幸了志用じともあ葉代果  
とふうけぬトといたれトとせあ

ゆき





